

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 18 日現在

機関番号：32665

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25885074

研究課題名(和文) ヴェブレンの経済思想の再評価：その経済学方法論と経済理論の統合的理解に向けて

研究課題名(英文) A Reconsideration of Veblen's Economic Thought: Toward a Mutual Understanding between the Methodology and Theory of his Economic Science

研究代表者

石田 教子 (Ishida, Noriko)

日本大学・経済学部・准教授

研究者番号：90409144

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：制度派経済学の祖とも言われるヴェブレンは、実践的な問題解決を目指す色彩の濃い20世紀初頭の「制度派経済学運動」の立役者たちとは一線を画す禁欲的科学主義者と位置づけられてきた一方で、辛辣な風刺家、あるいは独自の実践的立場を基礎に据えた社会批判者とも見なされてきた。本研究は、この二つのヴェブレン像の分裂を克服する道を探った。彼の科学史観を、個別に扱われがちな文明史観とつき合わせて読み解くことによって、彼の主唱した進化論的経済学という枠組みが、従来理解されてきたよりも拡がりがあり、実践的関心を帯びた方法論的提案であったこと、また基本的な社会福祉観を別にすれば多少の変化を経ていることを示した。

研究成果の概要(英文)：Thorstein Veblen, the founder of institutional economics, has been considered a stoical scientist who kept his distance from leading figures of the “institutional economics movement” exploring progressively practical ways to solve problems in the early 20th century. On the other hand, he has also been considered an acerbic ironist, in other words, a social critic based on his own unique practical ideas. This study aims to reconcile the divisions between these two portraits of Veblen. I show that the framework of evolutionary economics he advocated was a methodological proposition that has more greater scope and more practical interest than previously interpreted, and also that it underwent some changes except for his fundamental views of social well-being. This conclusion is drawn from carefully comparing his historical view of science with that of civilization, which had been in general treated separately.

研究分野：経済学史

キーワード：ヴェブレン 目的論 機械論 事実問題 産業技術 効率性 科学者 技術者

1. 研究開始当初の背景

(1) ヴェブレン研究の現状

T.B. ヴェブレンはアメリカ制度派経済学の始祖であり、進化論的経済学を最初期に構想した人物として知られており、一般に当時のアメリカ資本主義の本質を把握する経済理論を提示したのみならず、経済学方法論に関しても新たな問題提起を行ったと考えられている。しかし、国内外の先行研究が多数あるにもかかわらず、彼にとって「制度派経済学」ないし「進化論的経済学」という方法が具体的にどのようなものであったのかという本質的論点においては依然として確たる見解の一致はみていないのが現状である。そうした現状を打開するため、申請者はこれまで最初期のカント哲学研究(1884)や書簡(1890s)、同時代の近接分野の知識の受容等、経済学以外の文献も視野に入れる必要性を訴えてきた。

(2) 従来解釈の問題点

従来のヴェブレン研究において特に不十分と考えられるのは、実践的な問題解決の領域には立ち入らない禁欲的な科学主義者ヴェブレン像が一般的に受容されている一方で、アメリカ資本主義経済社会に対する辛辣な風刺家ないし社会批判者ヴェブレン像も同じく有力である点である。両者は一瞥しただけでは両立しえないように見えるが、いずれもヴェブレンを正確に表す「像」であると考えられる。申請者は、こうしたヴェブレン像の分裂をいかに克服するかという問題の解決を念頭においている。

2. 研究の目的

(1) 最終的な目的

本研究の目的は、19世紀末から20世紀にかけて活躍したアメリカの経済学者ヴェブレンの経済思想を方法論的観点から再評価し、彼の経済学方法論と経済理論を統合的に理解するための解釈的基礎を新たに提示することであった。本研究は、それにより、彼の経済思想を起点に勃興したとされる現代経済学のいくつかの系譜とオリジナルである彼の思想との関係を正確に解説し、さらには経済学方法論上の新視角を提示する道を拓くことが期待された。

(2) 分裂した「像」を統合する

上述の「像」の分裂問題は、それが単に伝記記述上の問題にとどまるわけではない点で深刻であった。というのも、それは認識論や科学哲学の分野で伝統的に争点となってきた科学的分析(事実問題)と価値判断(実践倫理)の架橋に関わる問題に通じるからである。その意味で、「像」の統合問題は彼の経済学方法論における学の領域問題に直結している。だが、いずれかの「像」を強調す

るにとどまる従来のヴェブレン研究においては、この問題が正面から取り上げられることはなかったのであり、本研究はこの問題の解消を具体的な目的とした。

3. 研究の方法

本研究は当初の計画どおり、次の3つの具体的な作業目的に沿って進められた。なお、基本的に経済学史研究である本研究は、主要なテキストを中心に、具体的には次の4つの作業を適宜繰り返す方法を採用した。一次的文献資料の翻訳、テキストの精読と解析、論点の整理、再構成、文章化、二次的文献資料の検討、学会およびワークショップ、Discussion Paper および論文等での研究報告、討論等の成果の吸収、である。

なお、テキストの解析に際しては、可能な限り原文に忠実に解釈することに努め、申請者が目指す再構成にそぐわないように見える文脈などが発見された場合でも、それらを省いたり、捨象したりすることは避け、原著者の意図をできるだけ汲み取ることを第一とした。それにより、用いられた概念の揺れや両義性、示唆する内容の変化にも一定の意味づけを重ねていくような解釈が可能となった。

(1) 科学方法論に関わるテキストの解析

科学方法論に関しては、最初期のカント哲学研究(1884)、1890-1900年代の経済学方法論関連文献の精査を行った。後者については、1919年に出版された論文集 *The Place of Science in Modern Civilisation and Other Essays* に収録された論稿が中心となった。

研究を進めていく上で判明したことは、ヴェブレンの歴史観を多角的に評価する視点の重要性である。特に、彼の科学史の論理構造と文明史のそれとを付き合わせながら読み込むことが、経済学方法論と経済理論の関係を統合的に理解するという本研究の目的にとって有効であるということである。したがって、そのような再構成を意識しながら科学方法論に関わるテキストの解析を行った。

(2) 経済理論に関わるテキストの解析

経済理論に関しては、当初は計画に掲げた文献をくまなく対象とすることは困難にも感じていたが、結局のところ消費者行動を中心に扱っている *The Theory of the Leisure Class* (1899)、営利企業体制とその後の将来像を論じている *The Theory of Business Enterprise* (1904) のみならず、後年に包括的に書き直された文明史的考察 *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts* (1914) を読み進めることができた。さらには、*The Engineers and the Price System* (1921) がベースとする人間論や経済社会ヴィジョンの再考という課題にも手を伸ばすことができた。

(3) 経済学方法論と経済理論の統合的理解の提示

繰り返しになるが、ヴェブレンの経済学方法論の論理を抽出するためには、彼の科学史の根底にある論理の再構成が不可欠であり、また経済理論の構造を理解する上では、彼の文明史の根底にある論理の再構成が不可欠であった。そして、考察を進める上で判明してきたことは、両者をつなぐ重要な媒体が彼の人間本性論であるということであった。このように、人間本性論を軸に二つの歴史観を接続することによって、科学者（ないし技術者）が参画するヴェブレンの経済社会像を浮き彫りにしていく可能性が拓かれていったため、そのような視角からの読解および論点の再考に努めた。

4. 研究成果

(1) 初期哲学研究の影響

若き日のヴェブレンはカント哲学を研究した経歴をもつが、その事実のみならず知られているものの、その研究が後の経済学構想とどのように関連するかという問題についてはあまり考察されずにきたのが現状であった。この点については、初期論稿を精読することにより、新たに判明したことがいくつかある。例えば、今回はカント哲学周辺の比較的新しい思想史解釈についても目を配ったが、目的論という世界観はダーウィン以降の生物進化論の進展により、一時的に大々的な批判に晒されるものの、その系譜は一つではなく、カントの「道徳的目的論」を出自とするような行為論的な系譜も存在するという解釈がある。こうした新しい解釈がヒントとなり、ヴェブレンの人間本性論を読み解く上でも少なからず参考になるという印象を抱くに至った。

また、19世紀後半のアメリカの思想状況について、中山大氏などは、最も権威あるスコットランドの常識哲学が主流であったにもかかわらず、政治的および社会的秩序に攻撃的であり、かつ無神論的であったドイツのカント哲学研究をヴェブレンが選びとった点を強調しているが、この解釈では実際にはサー・ウィリアム・ハミルトンを初めとする常識哲学者側がドイツ哲学思想を積極的に吸収し始めていた事実が抜け落ちていることを指摘した。ハミルトンのアメリカにおける解説者こそは、ヴェブレンの師ノア・ポーターであり、常識哲学由来のポジティブな影響、19世紀後半のアメリカにおけるドイツ思想受容の再考といった問題群が依然未決問題であることが明らかになった。この点は、ヴェブレンの哲学に関する最も包括的な研究と考えられるドガート氏の *The Philosophy of Thorstein Veblen* (1950) 以来、ほとんど掘り下げられていない。

(2) 初期哲学研究と後の経済学方法論の関係
従来、ヴェブレンは哲学から経済学へと専攻を変えた人物と考えられてきたが、本研究では、両時期の境界線はそれほど明確ではなく、むしろ前者から後者へ継承されていった論点が少ないという結論に達した。例えば、継承された論点としては、自然的目的論に対する批判的視点、人間本性の目的論的傾向の肯定、帰納的推論の実践的有用性の肯定、科学研究における累積的因果関係の重視が挙げられる。また、カント論を下敷きに示された実践概念、理論と実践の調停の論理は、本研究の目的にも示した二つのヴェブレン像の統合問題を解く手がかりとなると考えられる。

(3) 進化論的科学的機械論的方法の意味

進化論的経済学の基本的方法が機械論的方法であることは、ヴェブレン本人により繰り返し強調された論点である。その意味の一つは自然的目的論の方法ではないということであったが、さらに踏み込んでその内容を再構成しようとするとき、この概念に込められたさまざまな含意が明らかになった。

第一に、その方法は、事実問題を重視する科学者の精神態度、言い換えれば、日常生活における実践的諸問題への眼差しを必要とする。したがって、従来はそれほど問題とされてこなかったが、事実問題を重視するイギリスの認識論史における蓋然知論の系譜との関係の再考も新たな課題として浮かび上がってきたと言える。

第二に、彼の科学史上におけるこの方法の位置づけを彼の文明史上の歴史観とつきあわせることによって見えてきたのは、この精神習慣は、産業的な効率性を追求しようとする人間の本性（製作本能）を淵源として獲得され、社会のなかで継承されてきたという説明論理である。ここから言えるのは、ヴェブレンは経済学という科学の領域と実践的問題解決の領域とを明確に区別したが、実際には産業技術の進歩とともに進化する科学という歴史観に立脚する限り、科学、それゆえに経済学の実践的性格をより根本的なレヴェルで前提していたということである。

(4) 機械由来の精神習慣の含意

進化論的経済学のベースにあるとされた機械由来の精神習慣は、科学論の文脈においてはひたすら肯定的な意味を与えられていたが、文明史の文脈においては必ずしもそうではなかったことも分かった。1914年にははっきりと機械の論理が人間の本性とは相容れない可能性が議論されている。ここに見ることができるのは、機械由来の機械論的論理と人間本性由来の産業技術の論理という二つの機械論の並存である。この並存を、例えば、1904年の営利企業論や1921年の技術者論と重ね合わせるなら、そこに浮かび上がるのは、ビジネスの論理と、科学ないし機械の

論理と、産業技術の論理とが拮抗する三つ巴の構図である。したがって、本研究では、エアーズ氏らが定着させたヴェブレン的世界を二分法的に解釈する理解は単純すぎるのであり、正確ではないという結論に至った。

(5) 進化論的経済学の方法の再考可能性

過去の研究では、ヴェブレンの進化論的経済学の方法という場合、ダーウィンの生物進化論との関係にばかり関心が傾きがちであった。しかしながら、本研究において検討したように、ドイツ哲学からの影響、19世紀後半以降のスコットランド哲学からの影響、イギリス認識論からの影響等についても、新たな思想史的成果をふまえて改めて目を向ける重要性は決して小さくないだろう。この作業は、プラグマティズム等、当時のアメリカ思想界全体の俯瞰も必要とするだろうし、それらの諸系譜とヴェブレンの経済思想との関係を注意深く検討することができれば、依然として見解の一致を見ていない「制度派経済学」や「進化論的経済学」のオリジナルとしてのヴェブレンの経済学方法論の解説が実現すると考えられる。そして、ヴェブレン流リアリズムを起源とする現代経済学の方法論的再考は、こうした視座からの研究の延長線上にこそ可能となると期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

石田 教子, ヴェブレンの進化論的経済学における機械論の位置, 経済集志, 査読無, 第84巻, 第3号, 2014, 45-62

石田 教子, 若きヴェブレンのカント『判断力批判』研究 進化論的経済学のルーツをたどる, 経済集志, 査読無, 第84巻, 第2号, 2014, 43-67
<http://ci.nii.ac.jp/naid/40020299111>

石田 教子, ヴェブレンの文明史における機械の論理と人間の本性, 進化経済学会第18回金沢大会発表論文集, 査読無, 2014, 374-393
<http://toyomumasaki.w3.kanazawa-u.ac.jp/evo/29IshidaNoriko.pdf>

〔学会発表〕(計3件)

石田 教子, ヴェブレンの文明史における機械の論理と人間の本性, 第18回進化経済学会, 2014/3/16, 金沢大学(石川県・金沢市)

石田 教子, ヴェブレンの文明史における機械の論理と人間の本性, 日本経済国際共同研究センター(CIRJE)政治経済学ワークショップ, 2014/2/24, 東京大学(東

京都・文京区)

石田 教子, 稲上『ヴェブレンとその時代』におけるヴェブレン研究の新地平について 世紀転換期のアメリカとヴェブレンをどう捉えるか, 第19回アメリカ経済思想史研究会, 2013/10/19, 日本大学(東京都・千代田区)

〔その他〕(計3件)

書評

石田 教子, 稲上毅『ヴェブレンとその時代 いかに生き、いかに思索したか』新曜社, 2013年, 706頁, 経済学史研究, 第56巻, 第2号, 2015, 139-140

石田 教子, Tilman, Rick: Thorstein Veblen and His European Contemporaries, 1880-1940: A Study of Comparative Sociologies, Edwin Mellen, 2011, xiii+485 pp., 経済学史研究, 第56巻, 第1号, 2014, 135-137

ウェブサイト

<http://www.eco.nihon-u.ac.jp/~ishida/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石田 教子 (ISHIDA, Noriko)

日本大学・経済学部・准教授

研究者番号: 90409144